神川町	神川町立渡瀬小学校
研究テーマ	学校・地域の活性化のための学校運営協議会を中心とした学校応援団の活用

１　研究のねらい

本校が所在する渡瀬地区は、学校と地域・保護者との連携が密である。地域の方には様々な分野で学校教育活動へ理解と協力をいただいている。少子高齢化や共働き家族の増加等、子どもたちを取り巻く生活環境は大きく変化している。しかし、子どもたちにはふるさとを愛する気持ちを持ち、豊かな心を育んでほしいという学校・家庭・地域の願いは変わっていない。

本校の児童は、全体的に規範意識が高く、明るく素直で穏やかである。しかし、その一方で、少人数のため活力や競争心に乏しい。平成２９年度に実施したアンケートでは、「自己尊重の感情」が全校で低いという結果が出た。

自尊感情を高めたり、活力に乏しい等の課題を解決したりしていくために、学校が核となり、学校・家庭・地域のネットワークを通して、豊かな感性や人間関係の育成を図っていきたい。また、教育活動をより充実させるため、保・幼・小・中の縦のつながりだけでなく、学校・家庭・地域の横のつながりも重視したネットワークをつくる必要がある。

そこで、本校の研究を「学校・地域の活性化のための学校運営協議会を中心とした学校応援団の活用」として取り組むこととした。

２　活動の概要

神川町では平成３０年度からコミュニティースクールを始めている。本校でも学校運営協議会を立ち上げ、１２名の委員を任命し、体制を整えて今年で２年目になった。

学校運営協議会は、地域在住の学識経験者（元小学校長）を中心に、地域の人々との広いネットワークを持つ方で構成されている。年３回の協議会で学校の目標やビジョンを共有し、より絆を深めながら、一体となって子どもたちを育成するようにしている。学校運営協議会の委員には、ＰＴＡ会長や児童保護者もいるので、学校運営協議会委員と保護者が連携を取りやすくなっている。

３　研究内容（実践）

本校の学校応援団活動は、学校運営協議会委員の中にいるコーディネーターを中心として、主に①安全・安心面、②学習支援面、③環境整備面の活動を学校内外で行っている。

（１）　主な活動（実践例）

①安全・安心面（主に子どもたちの安全・安心に関わる活動）

学区には、２３軒の「子ども１１０番の家」が登録されており、子どもたちの安全を見守ってくれている。５月には、全校児童が、各通学路や近所の「子ども１１０番の家」

「子ども 110 番の家」お礼訪問

へお礼の訪問をしている。子どもたちにとっては、感謝の気持ちを表す場であるとともに、「子ども１１０番の家」の場所を確認する機会にもなっている。また、低学年の子どもたちは、上の学年の子たちの行動を見て、礼儀やリーダーシップを学んでいる。

②学習支援面（教科やその他の学習の補助、ゲストティーチャー等）

「地域の方との交流会」では、他人を敬う心や郷土愛の育成を図った。保護者だけでなく、学校運営協議会委員をはじめ、老人会や学校応援団活動に関わるたくさんの方々が来校し、昔の遊びなどを児童と一緒に楽しむ。地域の方からは、「地域には高齢者が多数いる。大人の経験を子どもに伝えたい。」という声があった。

③環境整備面（子どもたちの教育環境の整備・支援）

家族からの手紙を児童の誕生月に「誕生日メッセージ」として掲示し、自己の存在を肯定する家族のあたたかい言葉にふれられるようにしている。

（２）特色ある教育活動の実践例　　地域伝統芸能「カンカチ」

伝統芸能「カンカチ」の披露

「カンカチ」は地域の方からの提案により教育活動に取り入れることになった。運動会や、横浜の間門小交流会で披露している。練習のときは、渡瀬小学校の卒業生が来て踊りを教えてくれる。カンカチについて、学校運営協議会でも話題になり、交流会では、衣装の着付けや篠笛の演奏で、地域の方々が手伝ってくれた。伝統芸能のことを子どもたちに知ってもらいたいという家庭・地域の願いと、地域の伝統を教育活動に取り入れたいという学校の願いが一致したケースといえる。

４　研究の成果

「学校運営協議会だより」の発行

（１）学校運営協議会を年３回開催するとともに「学校運営協議会だより」を発行することにより、学校・家庭・地域間の情報交換が活発に行われるようになった。

（２）地域の行事や学校の行事に積極的に参加し合うことで、地域と学校との交流が深まった。アンケート調査では、様々な意見をいただくとともに、具体的な方策について建設的な意見をいただき、改善につながった。課題と方策を共通理解し、学校の教育活動を進めることができた。

（３）児童の学習の場・コミュニケーションの幅が広がり、表現も豊かになってきた。地域に対する愛着や誇りが育ち始め、自信につながってきている。

５　課題と今後の展望

（１）現在、学校応援団のメンバーは多方面で協力してくれているが、組織化が進んでいない。その理由として、児童数・家庭数の減少、共働き家庭の増加、高齢化などにより、PTA 活動や学校行事への参加が困難になりつつあることが挙げられる。

（２）世代交代が必要な中、後継者の育成と、地域人財の確保という問題が、解決できていない。地域の活性化や教育活動の推進を図っていくために、学校が核となり、新たに応援ネットワークを開拓していく必要がある。今後も学校運営協議会を中心として、学校・家庭・地域一丸となり、子どもの成長のために協力していきたい。

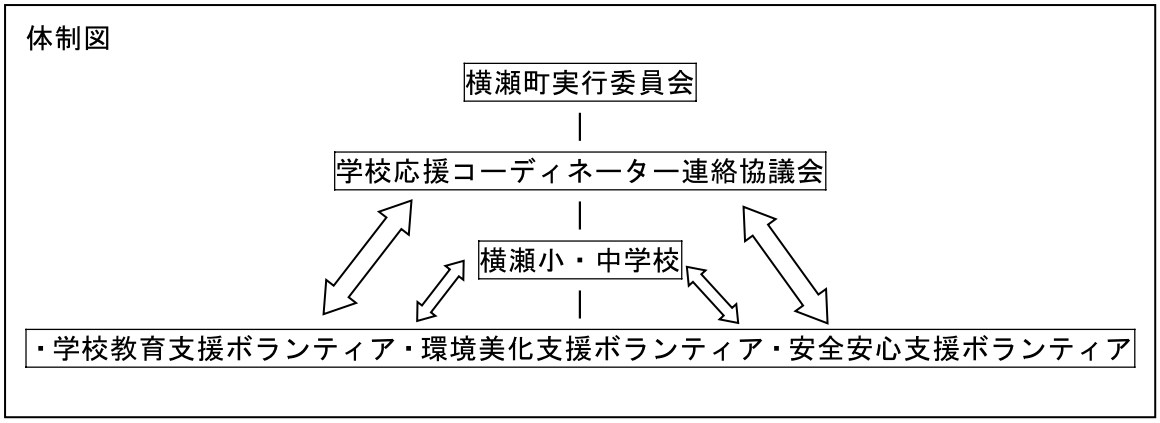
横瀬町	横瀬町立横瀬小学校
研究テーマ	学校と地域人材の連携による特色ある教育活動の推進

1　研究のねらい

横瀬町は人口約 8200 人の小さな町であり、町内には小・中学校各１校しかない。その分、学校と地域との距離は近く、本校の学校応援団の活動も大変充実しており、本年度も 100 名近い学校支援ボランティアの登録がある。

また、各学校に対する地域の期待も大きいため、この地域がもつ力を学校教育活動に活用していくことで、特色ある教育活動を推進することができ、目的を共有することで地域学校協働活動の充実が図られると考える。

2　活動の概要



（１）　組織体制とコーディネーターとの連携

本校の学校応援団活動では７名のコーディネーターと横瀬小・中学校の教頭、主幹教諭・教務主任各２名の計 11 名で学校応援コーディネーター連絡協議会を行っている。コーディネーターの中には町内の公共施設関係者もおり、地域全体で学校を支援する組織体制が構築されている。学校応援団登録の窓口も横瀬町教育委員会に一本化しており、横瀬小・中学校で登録者名簿や情報を共有できるようになっている。

（２）　横瀬町学校応援団の趣旨

横瀬町学校応援団の趣旨は「家庭を含む地域全体で学校教育を支援する体制づくりを推進することにより、教員の子どもに向き合う時間の増加、住民等の学習成果の活用機会の拡大及び家庭・地域の教育力の活性化を図ること」である。また、学校応援団の募集は年度末及び年度当初を中心に随時行っており、活動内容としては「参加する人の特性、経験を生かして自発的に行われるもの」とし、ボランティアさんの実態に応じて、無理のない範囲でお願いをしている。

3　研究内容

（１）　学校を支援する様々な活動

学校教育支援の取組

菊づくり、しいたけ栽培、読み聞かせ、クラブ活動、昔遊び、農業体験、福祉体験、休業中の自主学習補助などの学習への支援を行っている。

環境美化支援の取組

校庭の除草作業、花の苗植え、図書の整理等を行っている。

安全安心支援の取組

登下校時の見守り、防犯看板の整備などを行っている。

（２）　特色ある教育活動

本校第５学年では､総合的な学習の時間として１年間を通じて米づくりに挑戦している。もちろん学校敷地内には田んぼはないので、地域の方に提供していただいて取り組んでいる。場所はあっても、教職員に米づくりの経験のある者はほとんどいない。そこで学校応援団、地域の米づくり名人達の力をお借りするわけである。年度当初に新担任と打ち合わせを行い、その後も必要に応じて連絡を取り合う。いつ、何を、どのようにしたらよいのか、名人さんからは随時適切なアドバイスがある。

イネも植物、種まきから始めるのだが、ただまけばよいのではない。発芽を促進するために、温水に一週間ほど浸して管理する。育苗箱に種もみをまく際もどのようにまいたらよいのか、名人さんの指導は経験に裏打ちされた、子ども達にも大変わかりやすい指導である。田起こしでは鶏糞を子ども達が自分たちでまき、名人さんによるコンバインでの作業も見せていただく。その後田植え、網かけ、稲刈りと季節を追って作業が連続していくが、子ども達が作業をする日以外の細やかな管理を名人さんが陰でやってくださるのである。脱穀・精米した米は家庭科の授業で使用したり、横瀬小・中学校の給食として提供したりする。さらに、もち米は餅つき大会を行い、余すところなくいただく。

米づくりに取り組んでいる学校は少なくないかもしれないが、本校ほどの規模で継続的に取り組めている学校は多くないと自負している。しかし、この教育活動は学校応援団の米づくり名人達の力なくしては継続不可能である。「作業の大変さと機械の便利さの両方を感じて、ご飯をありがたくいただく人に育ってほしいね。」という名人さんの配慮が、学校応援団の支援の域を超えた本校の特色ある教育活動といえる所以である。

［菊づくり］

［図書の整理］

［登下校時の見守り］

［第5学年　米づくり］

４　研究の成果

（１）　学校を核としたネットワークを基盤とした地域学校協働活動の推進が図られており、町ぐるみで横瀬の子ども達の教育活動が行われている。

（２）　学校を支援してくださる地域の方々への感謝の気持ちや、食やものを大切にする気持ちが育まれている。

（３）　ボランティアの方からは子ども達の成長に対する喜びの声や、学校に対する期待の声が多く寄せられるようになった。

５　課題と今後の展望

（１）　現在の支援体制を継続・深化させていくためにも、支援ボランティアの方の人材確保及び各活動の後継者育成が必要となる。

（２）　令和２年度より学校運営協議会の導入が決まっている。これまでの組織体制とのバランスを取りながら、よりよい支援体制を構築していくことが求められる。

加須市	加須市立加須南小学校
研究テーマ	地域学校協働活動の充実 ～学校・家庭・地域が一体となり取り組む協働活動の促進～

１　研究のねらい

本校は平成１０年に創設された比較的新しい学校である。開校当時から地域の方々の見守りや学校への協力があり、それがそのまま「学校応援団」の活動へと引き継がれている。６人のふれあい推進長が学校内の「みなみステーション」に常駐し、学校応援団の調整を行い、校内の環境整備や児童の学習への支援等の中心を担っている。しかし、教員や児童が「支援があるのが当たり前」という意識になり活動が学校応援団に依存傾向となってしまったり、家庭との連携が少なくなってきたりしている。

そこで本来の目的である「地域とともに歩む」という目的を再認識し、学校・家庭・地域が一体となって児童の育成に対して組織的に取り組む協働活動の推進をしていく。

２　活動の概要

「学校応援団組織図」

（１）　経営方針における位置付け

本校においては「学校」、「家庭」、「地域」の連携を「いきいきステーション」と名付け、ここに常駐するふれあい推進長が綿密に学校との情報交換や学校応援団員との調整を行っている。主に子供たちの見守りを行う「安心・安全応援団」と学校環境整備を行う「環境応援団」、体験学習等のサポートを行ってくれる「学習支援応援団」が設置されている。

（２）　組織体制とコーディネーターとの連携

コーディネーターを担っているのは各町内会長やその経験者から選出される６名の「ふれあい推進長」である。６名は、校内にある「みなみステーション」に常駐し、環境整備や見守り、学習支援等を、自身も含めながら他の応援団員との調整を行い、活動を実施している。月に１度「推進長会議」を学校側（校長、教頭、教務）と行い、校内行事や日ごろの環境整備等、必要な事柄について情報の交換と共有化を図っている。

（３）　主な活動内容

【安心・安全応援団】･･･　登下校の児童の見守り、あいさつ運動、パトロール会議　等
【環境応援団】　　･･･　野菜の栽培、グリーンカーテンづくり、除草活動　　等
【学習支援応援団】　･･･　昔の遊び体験、郷土芸能クラブ、夏のカレーづくり　　等

３　研究内容

（１）　学校・家庭・地域の連携を強化した組織体制の見直し

学校と地域では、ふれあい推進長が月１回の「推進長会議」で学校行事や校内の環境整備等について確認を行い、そこから学校応援団員の方々への連絡調整、教育活動への協力をいただいている。また、学校とＰＴＡにおいては、月に１度の「スタッフ会議」を通して活動や行事の確認を行い、協力をいただいている。地域と家庭との連携においては、ＰＴＡから学校応援団員として参加をしていただいたり、親父の会の活動に学校応援団員の方々にも参加をしていただいたりするなど、それぞれの結び付きを強めた。

「いきいきステーション組織図」

（２）　教育課程に基づく学校応援団年間事業計画と学校応援団リストの見直し

教育課程に基づき、それぞれの組織に活動をしていただくための「学校応援団年間事業計画」を見直した。学習目標とその組織のねらいが一体となり、体験学習や学校応援団の活動をより効果的に実施することができた。また、そのために「学校応援団リスト」には学校応援団員の地域での役割や特技なども明記した。目標に応じて、各々の特技を生かし意欲的に活動に参加をしていただくことができた。

（３）　ふれあい、感謝の気持ちを伝える場の設定

学校応援団の方々の協力に対して、児童が作ったカレーを一緒に食べたりして感謝の想いを伝えられる機会を設けている。

「ふれあい推進長紹介式」では、ＰＴＡにも参加をしていただき、合唱と合奏をして感謝の気持ちを表した。

「ふれあい推進長紹介式」

「カレーづくり」

４　研究の成果

（１）　学校応援団の年間計画を随時見直して運営していくことで、児童からは「実際にやってみてよく分かった。」「できないところを助けてくれたのでできるようになった。」等の感想を聞くことができ、効果をあげることができた。

（２）　地域人財を活用することで、児童、保護者、地域の方々との交流が図られ、地域のつながりが深まった。

（３）　新たな取組を行う中で、地域の方々から「さらに学校のために活動したい。」という意欲の向上が見られ、活動の拡大や新たな人材の発見につながった。

５　課題と今後の展望

（１）　学校応援団の方々の高齢化とそれに伴う新たな人材のさらなる確保が課題である。家庭から学校応援団を募集する等保護者にも呼びかけを行ったり、市教育委員会が調整役として連携機関につないだりする等して、新たな人材確保に努めていく。

（２）　体験学習における学習目標の共有化を十分に図っていく必要がある。そのための時間の確保を教員と応援団員との間で設定していかなければならない。隙間の時間を効果的に活用し、更なる連携に努めていきたい。

（３）　児童に対する情報や地域における情報をどのように共有していくのか、その規定がしっかり定められていない。プライバシーの問題等もあるため今後決めていく必要がある。

令和元年度
「地域学校協働活動」
実践事例集
埼玉県教育委員会

令和２年３月発行

編集　埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課

〒３３０－９３０１　さいたま市浦和区高砂３－１５－１

電　話　０４８－８３０－６９７９

ＦＡＸ　０４８－８３０－４９６４

E-mail　a6975-05@pref.saitama.lg.jp

埼玉県のマスコット「**コバトン**」「**さいたまっち**」